

試験の問題冊子の文字サイズと判サイズに対する 適否の主観的評価と解答時間の関係

○永井伸幸
(宮城教育大学)

氏間和仁
(広島大学)

相羽大輔
(愛知教育大学)

今津麻衣
(広島大学)

KEY WORDS: 視覚障害 試験 問題冊子

(目的)

現在、大学入学共通テストにおける問題冊子に関する配慮として、通常の問題冊子（10 ポイント・B5 判）以外に 14 ポイント（B4 判）、22 ポイント（B4 判）の拡大問題冊子の提供が行われているように、問題冊子及び文字の拡大が受験上の配慮として提供されている。ところで、問題冊子の文字サイズを拡大すると 1 ページに収まる文字数が減少しページ増につながる。また、文字サイズと冊子の判サイズを拡大するとページ増を防ぐことができるが、大きな動作が必要となり取り回しの手間を増やすことにつながると考えられる。つまり、文字サイズや判サイズの拡大は、そのこと自体が視覚障害受験者に対して解答の効率を下げる不利益をもたらしている可能性がある。そこで我々は問題冊子の拡大方法が解答時間に及ぼす影響について晴眼大学生を対象に研究を行い、拡大が解答時間を遅延させていたことを示した（氏間・永井・相羽・今津、2021）。ここでは、そうした解答の効率と参加者の「解答しやすいかどうか」という適否の主観的評価との関連について報告する。

(方法)

参加者：書面にて同意を得た 18 歳から 23 歳の大学生および大学院生 131 名を対象とした。

課題：大学入学共通テストの国語の長文問題を模した問題を作成した。長文の代わりに数字が縦書きに記された列の一部に傍線を引き、傍線部と同じ並びの数字列を選択肢の中から選択するという問題を用いた。また、最も解答しやすい（解答易）と感じた形式と最も大変だった（解答難）形式について主観的評価を課した。

条件：原本冊子（10.5 ポイント、B5 判）、文字拡大冊子（22 ポイント、B5 判）、文字・判拡大冊子（22 ポイント、B4 判）の 3 条件設定した。1 問題冊子あたり 10 問設定し、各条件 5 冊子使用した。

手続き：参加者は開始の合図とともに練習冊子を解答し、続いて問題冊子を解答した。解答方法は、選択肢に直接丸を付ける方法とした。各問題冊子の解答を始める直前に室内前方に設置した時計を確認し、分と秒を開始時間として所定の表に記入し、10 問目を解答し終えたら再び時計を確認し、終了時間として分と秒を記入した。問題冊子 3 条件の提示順は参加者間でカウンターバランスを取った。実験終了後、冊子形式の適否の主観的評価を行った。

(結果)

各条件 5 試行の解答時間の中央値を用いた。131 名の中央値は、原本 246 秒、文字拡大 318 秒、文字・判拡大 279 秒であった。原本で 10 問解答した時点で、文字拡大では 7 問、文字・判拡大では 8 問解答終えている程度の違いを意味する。また、解答が最も短かった条件は、原本 121 名、文字拡大 2 名、文字・判拡大 8 名であった。表 1 に適否評価の結果とその回答数および回答者のうち「適」と判断した条件の解答時間が否と判断した条件よりも短かった人数の関係を示した。

表 2 適否の主観的評価の結果

解答易（適）	解答難（否）	回答人数	適<否（解
			答時間:人）
原本	文字拡大	54	53
原本	文字・判拡大	31	27
文字拡大	原本	11	1
文字拡大	文字・判拡大	9	3
文字・判拡大	原本	12	1
文字・判拡大	文字拡大	14	12

解答時間からは約 92%の参加者で原本条件が最も解答効率がよかった。しかしそのうち 36 人は異なる条件を「適」とすると判断していたことが示された。主観的評価の記述に含まれていた内容を抽出すると、いずれかの拡大条件を「適」と判断した理由は、「文字が大きい、見やすい（15/20 件）」「紙の大きさがいい、扱いやすい（7/20 件）」などであり、原本条件を「否」と判断した理由は「文字が小さい（17/20 件）」「探すのが大変（3/20 件）」などであった。さらに、いずれかの拡大条件を「適」と判断した参加者の多くは、「否」と判断した条件の解答時間の方が短い傾向であったが、文字・判拡大条件を「適」、文字拡大条件を「否」と判断した 14 名については 12 名で「適」と判断した条件の方が解答時間が短かった。これらの参加者は「拡大（8/14 件）」「原本のままの拡大（3/14 件）」から文字・判拡大を「適」、「選択肢の行数が増えた（8/14 件）」「ページ数が増えた（6/8 件）」から文字拡大を「否」と判断していた。

(考察)

原本条件の効率がよいにもかかわらず拡大冊子を好んだ参加者は、効率よりも快適さを根拠にしていた。これには、読み慣れない数字列を用いた課題であったことも影響している可能性がある。文字拡大条件は、ページ数よりも行数が増えることを嫌っている傾向が示された。解答時間も最も長く、効率も快適性も低下していることが示された。こうした傾向が、拡大文字を必要としている視覚障害者でどのように示されるのかについては今後の課題である。

(文献)

氏間和仁・永井伸幸・相羽大輔・今津麻衣(2021) 印刷書式が選択式解答時間に与える影響。第 22 回日本ロービジョン学会学術総会プログラム・抄録集, 67.

附記：本研究は広島大学大学院人間社会科学研究科倫理審査の承認を受け（承認番号 2019511）、科研費(18H01040, 19H00623, 21H00888)の助成を受けた。

(NAGAI Nobuyuki, UJIMA Kazuhito, AIBA Daisuke, IMAZU Mai)